寛文の真宗関係浄瑠璃

――出羽や播磨の語草――

沙加戸　弘

はじめに

寛文六年十一月、報恩講をあてこんで、伊藤出羽掾は『よこぞねの平太郎』[1]、井上播磨掾は『ほうねんき』[2]と、それ〴〵新時代を開くべき作品を上演した。

蓋し、真宗関係浄瑠璃において、平太郎伝浄瑠璃はこの『よこぞねの平太郎』を以て、七高僧伝浄瑠璃はこの『ほうねんき』を以て嚆矢とする。すなわち、管見に入った正本・記録で見る限り、真宗関係浄瑠璃はこの年以後、親鸞伝の他に平太郎伝と七高僧伝とを新たに展開させることになるのである。

すなわち、寛永古活字版『しんらんき』以後、親鸞伝を唯一の素材として上演、刊行を重ねてきた真宗関係浄瑠璃が、この寛文六年に至って新たな局面を開いた、ということになる。

後述するように、このことの背景に、正保五年以後、上演の度毎に中止を訴えてきた東本願寺の何らかの動き、あるいは東本願寺に対する浄瑠璃興行界の何らかの対策を推定することができようが、いずれにせよ寛文六年、浄瑠璃興行界は真宗関係浄瑠璃において親鸞伝から一歩踏み出す。すなわち、伊藤出羽掾は親鸞の弟子に、井上播磨掾は師に、新しい素材を求めたのである。

この寛文六年十一月を起点とする数年間、具には寛文十二年十一月までの六年間は、真宗関係浄瑠璃の展開という面から見ても、ま

た出羽・播磨の対抗関係という面から見ても、更には東本願寺の出版・浄瑠璃興行に対する対応という面から見ても、まさに節目と言うべき六年間であった。

本稿ではこの六年間を、出羽掾三作、播磨掾四作の上演作と、東本願寺の対応とを考えあわせつつ、概観してみたい。

一、『よこぞねの平太郎』と『ほうねんき』、『善だう記』

伊藤出羽掾正本『よこぞねの平太郎』は、前述したように寛文六年十一月、八文字屋八左衛門から刊行されたもので、現存する正本の中では最も早く平太郎（真仏）を主人公として正面に立てようとした作である。

この『よこぞねの平太郎』の特徴については、かつて拙稿「平太郎伝の展開――浄瑠璃を中心として――」[3]の中でふれ、

一、平太郎平氏説をうち出し、平太郎の前半生を創作した。

一、しかし、後半部（第三の半、平太郎と上人の出会以後）は完全な親鸞伝である。

一、従って、前半部と後半部に断絶と矛盾がある。

一、平太郎の熊野参詣説話は、それまでの親鸞伝浄瑠璃におけるそれと、位置・大きさ共に等しい。

一、全体として、統一のとれた平太郎伝浄瑠璃とは言い難い。

等の点を指摘した。

しかしながら、『よこぞねの平太郎』の問題点はこれにとゞまらない。

伊藤出羽掾は井上播磨掾との対抗上、『よこぞねの平太郎』において親鸞の弟子平太郎をとりあげる、という新機軸を打ち出しながら、親鸞伝から離れることなく、その後半は逆に井上播磨掾の先行作『浄土さんたん記并おはら問答』から強い影響をうけ、ほとんど親鸞伝そのまゝの展開となった。

さらにその後半部、東本願寺からの訴えをかわすために、「親鸞」（作中では「善心」）の名を伏せることに苦心している。

つまるところ、この『よこぞねの平太郎』は、寛文六年の段階で伊藤出羽掾が併せ持っていた課題、すなわち井上播磨掾との対抗関係、真宗関係浄瑠璃とりわけその本流である親鸞伝に対する大きな関心、そして東本願寺対策と、この三つを折衷する形で妥協点を見出した新作、ということになる。

これに対して、同年同月井上播磨掾が書肆山本九兵衛から刊行した『ほうねんき』は、内容も構成も一貫した高僧伝浄瑠璃である。

『よこぞねの平太郎』のように前半後半が分断されるということもなく、また途中で誰が主人公なのかわからなくなる、というような内容の曖昧さもない。法然という高僧の生涯を、劇的な事件を追いながら無理なく展開させている。

具体的な人名や奇瑞説話については、作者の誤りや本曲の創作と思われる部分もあるが、それらは演劇構成上の理由を問うのでない限り、さして問題とはならない。

要するに『ほうねんき』は、法然伝浄瑠璃として間然するところがない、と言ってよい。

ところが、この『ほうねんき』を、真宗関係浄瑠璃として見た場合、つまり親鸞の師法然、という視点で見た場合、不自然な程親鸞との関わりが無視されていることに気付くのである。この『ほうねんき』の素材のまゝで考えても、最少限流罪の段には必要と思われるにもかゝわらず、である。

一見、これは想定対象（享受者）がちがうのではないか、法然伝そのものであって、厳密な意味では真宗関係浄瑠璃でないのではないか、とさえ思わせる。

しかしながら、この見方は否定せざるを得ない。『ほうねんき』は、

それおもんみるに。人間のみはくわたくの内にしのびがたきは。

へつらひのほなふ――中略――こゝにじやうとしんしうのかいさん。ほうねん上人の、ゆらひをくはしくたづねたてまつるに。

（傍点筆者）

と始まる。播磨掾がこの作を、真宗関係浄瑠璃であると考えていたことは明らかである。

となれば、親鸞の師法然を素材として描いた浄瑠璃『ほうねんき』において、播磨掾が完璧なまでに親鸞の事蹟に及ばなかったのには、明確な意図があったと考えざるを得ない。

すなわち、作品としてはそのあらわれ方が全く異なっているにもかゝわらず、ここには出羽掾が『よこぞねの平太郎』を上演したと全く同じ理由が考えられよう。

真宗関係浄瑠璃に深い関心をよせ、一方で出羽掾と対抗関係にあり、かつ東本願寺からの訴えによる上演禁止をかわそうとする播磨掾が、まぎれもない真宗関係浄瑠璃でありながら親鸞に一行もふれず、しかも親鸞を描いたに近い効果をあげうる、そしてよせあつめでなく一貫した斬新な浄瑠璃を上演したのである。素材は、「正信念仏偈」等によって真宗門徒には耳なれた念仏伝灯の祖師達――七高僧――であった。

つまりこの『ほうねんき』は、出羽掾と同じく、さま〴〵の制約を併せ持つ播磨掾が、その制約を折衷するのではなく、全く新しい素材と方法で乗りこえようとした、七高僧伝浄瑠璃の第一作、とい

うことになる。

このことを裏づけるように、播磨掾は寛文十年、七高僧伝浄瑠璃の第二作『善だう記』[4]を上演した。法然の次に善導をとりあげることには、十分すぎる程の必然性がある。が、この『善だう記』は前作『ほうねんき』と少しく趣きを異にする。

一言にして言えばこの『善だう記』は、素材を法然一人に絞り、その他の真宗関係の事蹟は宗壁なまでに排除した前作『ほうねんき』から、大きくゆりもどしたのである。

この『善だう記』は、大筋善導の一代記の形をとりながら、『今昔物語集』の源信、『本願寺聖人親鸞傳繪』の親鸞を俤とし、さらに作中、曇鸞、道綽の名が、親鸞へと受け継がれるものとして、あるいは親鸞が受け継ぐものとして語られる。加えて結末は、臨終を控えた善導が自らの像を作し、香華を供え、我滅後には我にかわって一切衆生を利益あれと念ずると、それに応じて自作の像が奇瑞を示すという、播磨掾の先行真宗関係浄瑠璃『浄土さんたん記并おはら問答』と同じ趣向が用いられている。

つまるところ、この『善だう記』は、表面上前作『ほうねんき』の単なる延長上にある如く見せかけながら、中に多くの真宗関係の素材をちりばめ、親鸞の名までさりげなく織り込んで、『ほうねんき』から大きくゆりもどした真宗関係浄瑠璃となったのである。

二、『善だう記』以後

さて、極端に親鸞関係の素材を排除した『ほうねんき』、大きくゆりもどした『善だう記』と試行を重ねた播磨掾は、翌寛文十一年、旧作『浄土さんたん記并おはら問答』[5]を再演する。このことは『粟津家文書』[6]の中に記録されている。所謂「浄瑠璃本平太郎板行一件」中の記録である。やゝ長いがその部分全文引用する。

於同所播磨一札之写

差上申一札之事　　此本紙大坂奉行所ニ有之

一、此比播磨と申上るり大夫所ニ而　如何様之浄るり仕候哉と御吟味被成候　法然上人之御事を作リ申　念仏讃談記大原問答与申操仕候　善信ハ法然之弟子ニ而御座候　付所々ニ善信ノ事を作り入　去月廿二日ゟ同廿八日迄操ニ仕候処　難波御堂八郎右衛門方ゟ　親鸞記ハ前廉も御公儀へ断申上御停止ニ被仰付候間　無用之由　葭屋九郎兵衛を以由越候　親鸞ニ而無御座候得共　心得候由返答致候　五月朔日ゟ散々口中を煩　頃ニ作替候事も不罷成　一昨五日ニ讃談記を語リ　昨六日ニ者聖光

上人と申浄るり作替語候由申上候へハ　先年出羽所ニ而親鸞ノ事を操仕候刻　本願寺ゟ断有之御停止之由　出羽　次郎兵へ　長右衛門　対馬ニ　手形被仰付候　其後も平太郎と題号を付親鸞之事を作入　出羽所ニ而両度迄操仕候故　以来停止之由被仰渡候　其時之判形之者ニ而無之とても　仰渡シを不存義有之間舗と被思召候　然上ハ題号を付替候とても親鸞之事を作入操仕候義ハ不届ニ被思召候間　以来親鸞之事を操仕間舗旨被仰渡奉得其意候　残之芝居之者共ニ　被仰付候儀ニ而も相背申間舗候　若違背仕候ハ、　如何様ニも可被仰付候

為後日之仍如件

寛文拾壱年辛亥五月七日

上るり大夫疊屋町

播磨　印判

道頓堀町年寄

吉左衛門

芝居主

喜左衛門　印判

御奉行様石丸石見守殿也

この資料によって、寛文十一年四月二十二日より同二十八日までと寛文十一年五月五日の計八日間、大坂道頓堀の井上播磨掾の芝居で、『念仏讃談記大原問答』という作が上演されたことが判明する。

ここで言う『念仏讃談記大原問答』は、現存する播磨掾正本の『浄土さんたん記井おはら問答』であろうと推定されるが、この上演によって播磨掾は東本願寺から訴えられた。

さらにこの記録によれば、『しんらんき』はもとより、『平太郎』――あるいはこれが『よこぞねの平太郎』を指すかと思われるが――という題でも、出羽掾が東本願寺から訴えられていたことがわかる。「平太郎と題号を付」けた浄瑠璃は、現存のものでは『よこぞねの平太郎』のみである。もしこの浄瑠璃が『よこぞねの平太郎』であるとすると、出羽掾が上演して訴えられたのは、寛文六年十一月以降、寛文十一年四月までの間、それも文中「両度迄」とあるから、少くとも初演を含めて二度、出羽掾は『よこぞねの平太郎』を舞台にかけていることになる。

この間の事情を播磨掾が間近に熟知していたことは、「其時之判形之者ニ而無之とても　仰渡シを不存義　有之間舗」と叱られていることでわかる。

つまり播磨掾は、極端に真宗色を排除した『ほうねんき』、大きくゆりもどした『善だう記』、そして親鸞伝と、出羽掾に対する東本願寺の対応を視野に入れながら、市場性に富む真宗関係浄瑠璃、

最終的には親鸞伝浄瑠璃へと、一足ずつ踏み込んでいったのである。

この動きに対して、一方の出羽掾がこの時期上演した作に『どんらんき』[7]がある。

『どんらんき』は、言うまでもなく真宗七高僧の一師曇鸞の一代記である。羽衣伝説、地獄めぐり等の趣向を巧みにとり入れながらも、菩提流支三蔵による『観無量寿経』教授、仙経焚焼は外さず、首尾一貫した曇鸞伝となっている。

この『どんらんき』が、まぎれもない真宗関係浄瑠璃であることは、

こゝに、ほんてう、じやうどしんしうに、七高しうとたつとむ（ママ）
中に、第三にあたらせ給ふ、どんらん大しの、しゆしやうを、
たづね奉る

と始まることで明らかである。が、作中、親鸞の名は直接的には一度も語られない。そのかわり、前述した菩提流支三蔵による『観無量寿経』教授の場面に、

爰をもつて、本願寺の、しよしんげにいわく、三ざうるし、しゆしやうけうほん、しやうせんきやうきらくほう、天じんぼさつろんちうげとも、のべられ
おなじく又、かうそうわさんにほんし、どんらんくはしやうは、ぼだいるしのをしへにて、せんきやう、ながくやきすてゝ、じやうどにふかく、きせしめきと、しやくし給ふは、今此所のこととかや　上代まつせにへだたれ共、念佛くりきはかはる事もましまさず、扨こそ、じやうどしんしう、七かうさうの第三ばん、どんらんだいしと、あがめられ給ふかや、かのどんらんの御しゆ行、有がたし共中〳〵に、何にたとへん方もなし

と、「正信念佛偈」ならびに「高僧和讃」が引用されている。さらに「第五」には、曇鸞が手にした魚を投げると、川向いの幡に六字の名号がすわるという、『しんらんき』以来の奇瑞説話「川越の名号」の趣向がとり入れられ、念佛の伝灯という視点から龍樹・道綽の名も語られている。

七高僧伝に真宗関係の素材をちりばめて真宗色を強め、親鸞を直接語ることはほとんどないまま真宗関係浄瑠璃を作り上げる、という手法は、先に播磨掾が『善だう記』で示したところである。となるとこの作は、『よこぞねの平太郎』において、播磨掾の『浄土さんたん記』井おはら問答』から大きな影響をうけた出羽掾が、再び播磨掾にその手法を学んだ、ということになろう。そのような結果となった理由の一つは、寛文十一年の播磨掾に対する東本願寺の措置、に対する出羽掾の意識であった、と言えようか。

このような出羽掾と播磨掾の対抗関係と方向模索の中、寛文十二年

十一月、東本願寺からの訴えにより、靏屋喜右衛門・八文字屋八左衛門両書肆による親鸞伝関係の出版が禁止されることになる。

すなわち、寛文十二年十一月、東本願寺は京都町奉行能勢日向守へ訴え、親鸞にかゝわる絵草子・浄瑠璃の刊行を停止せしめた。前出資料、『粟津家文書』中の「浄瑠璃平太郎板行一件」中に記される事件である。

この問題については、既に研究成果の一部として発表したところであるので、詳細は省略し、要点のみを記しておきたい。[8]

この記録は、浄瑠璃史解明に寄与するところ頗る多く、よって従来論考またその方向に偏頗する憾なしとしなかった。

しかし、この問題の中心は、親鸞伝の浄瑠璃化にあったのではなく、実は『御傳鈔』の仮名草子化にあったのである。

簡単には拝見できない、願によって拝読が伝授される、伝授がなければ拝読できない、そういう重い書物を、誰でも読める平仮名に直し出版されては、御公儀より知行を遣わされていない東本願寺は成り立たないと、生活権を前面に押し出しての経済闘争であった。

要するに親鸞伝浄瑠璃は、まさにこのあおりをくった形で、結果として刊行停止に至ったのである。

三、『十界二河白道とうしやくぜんし』と『一心二河白道』

正保五年以来繰返されてきた東本願寺と浄瑠璃興行界の、親鸞伝浄瑠璃をめぐってのいたちごっこは、寛文十二年十一月、『御傳鈔』の仮名草子化に危惧を抱いた東本願寺の強い措置のあおりをくった形で、刊行停止という結末を見た。

この東本願寺の措置の後、播磨掾と出羽掾は寛文十三年三月、二河白道で再び競演する。すなわち、井上播磨掾は『十界二河白道とうしやくぜんし』[9]、伊藤出羽掾は『一心二河白道』[10]、寛文六年の競演をそのまゝに、同年同月、此度は書肆も同じく山本九兵衛である。

この二作、特に真宗関係浄瑠璃として出羽・播磨の競演、という観点から見ると、際だった対照を見せる。

まず、播磨掾は、お家芸とも言うべき七高僧伝、それも播磨掾の正本で言えば、親鸞に始まって、法然、善導とさかのぼり、此度の道綽と、非常に必然性の高い素材であると言えよう。

現存する正本は、東京大学の霞亭文庫の所蔵本のみで、虫損・破損があり欠落もあって、完全を期し難い面もあるが、内容は『ほうねんき』、『善だう記』に見られる着実な手法による道綽禅師の一代

記である。

その前年、すなわち寛文十二年五月、江戸で刊行された肥前掾正本『十界圖』[11]及び「二河白道」の趣向をとり入れ、末尾に至って曇鸞、道綽の師弟関係を述べ、

ころは、とうのたいそう上くはん九ねんきのとのみ四月廿七日に、じゆねん八十四才にて、だうしやくぜんし、にうじやくある、日ほんにをゐて、ほうねん上人とあらはれ給へは、また、どんらん大しは、しんらん上人とけんし給ひ、ぐとんのしゆじやうを、りやくある、ぶつほうはんじやう、めでたかりともなか〳〵申はかりはなかりけれ

と結ぶ。全体として真宗色は薄く、末尾に曇鸞の名が二回、親鸞の名が一回、それ〴〵語られる、という程度である。してみると、この『十界二河白道とうしやくぜんし』の真宗関係浄瑠璃としての位置は、これまでの播磨掾の上演作で言えば、『ほうねんき』よりは真宗色が濃いと言えるが、大きくゆりもどした『善だう記』とはかなり距離がある、ということになろう。

一方の出羽掾は、『一心二河白道』という、非常に斬新な作で対抗した。

「二河白道」で播磨掾と対抗・競演した、という枠組の中に置いてはじめて、真宗関係浄瑠璃と見られなくもない、という見方がようやくできる、という程に真宗色は希薄である。

内容は、丹波の国老の坂の子安地蔵の縁起譚に「二河白道」の趣向をとり入れた、清玄桜姫の物語である。東本願寺の措置への対応と、出羽・播磨の対抗関係の中で生まれた作ではあるが、この桜姫の物語は、以後二百数十年、浄瑠璃・歌舞伎で根強い人気を保ち続けることになる。

この二作の背景には、真宗道場の談義の場で語られた「二河白道」、あるいは絵説としての「二河白道」があることは言うまでもないことである。

以上、述べ来ったように、寛文年中の真宗関係浄瑠璃は、東本願寺の動きを軸に、出羽、播磨の対抗関係の中で推移した。

また、両者の風を概観すれば、一作の内容においても、また上演作相互の関係においても、播磨掾は一貫性を重んじ、出羽掾は新趣向を求める傾向が強い、と言えよう。

註

1　『古浄瑠璃正本集　第四』による。

2　同右
3　「大谷学報」第五十九巻　第二号。
4　『古浄瑠璃正本集　第五』による。
5　『　同右　　第四』による。
6　大谷大学蔵『粟津家文書』中の「浄瑠璃本平太郎板行一件」による。
7　『古浄瑠璃正本集　第五』による。
8　付記参照。
9　『古浄瑠璃正本集　第九』による。
10　『　同右　　第四』による。
11　『　同右　　第五』による。

付記

本研究の成果の一部は　既に

「『親鸞伝絵』受容略史――絵解の成立――」（演劇研究会会報第十五号」　平成元年六月二十日刊）

「『ほうねんき』から『善だう記』へ――寛文の播磨掾――」（「大谷学報　第六十九巻　第一号」　平成元年六月二十日刊）

「『親鸞聖人『御傳鈔』の仮名草子化をめぐって――」（大谷大学文藝論叢　第三十三号」　平成元年九月三十日刊）

として発表した。従って当論文は前偈三論文と一部重複するところがある。

尚、本研究を推進するにあたり、東京大学図書館、早稲田大学図書館、龍谷大学図書館、お茶の水図書館、東北大学図書館、東京教育大学図書館、日比谷図書館、西尾市立図書館、東洋文庫、他多くの研究機関、図書館の御好意をいたゞいた。記して篤く御礼申し上げる。